



News Letter

No. 7 February 2006

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

間尺の問題



繁樹 算男
(東京大学)

かなり以前になるが、ディスカヴァリーチャンネルで「Future is wild」という番組を見たことがある。「Wild, Wild West」といったハリウッド映画ばりのネーミングである。ケーブルTVのあまたある番組の中で目に留まったのは、もちろんこのタイトルのせいではなく、きれいな絵と内容の面白さであった。地球の環境条件の変化の予測を背景に、ゲノムの安定性と若干の変異、ゲノム間の生存競争という進化原理を羅針盤として、5千万年後、1億年後、2億年後の生物を予測する番組である。番組作成に協力した生物学者も楽しんでこの番組を作ったに違いない。今でも、絵として記憶しているのは、地上を闊歩する巨大なこ、海上を疾走する帆船のようなくらげ、4枚羽根で高速飛行する鳥等々である。このようなタイムスケールの予測では、人間はすでに消滅し、最後の哺乳類は、進化した昆虫に家畜として養われることになっている。

しかし、ここで扱われるタイムスケールは、人間を理解し、人間の将来を考えるためのものとしては長すぎる。間尺に合わない。過去に遡って人間の感情の由来を知りたいためだとしても、将来人間がどうなっているかを考えるためだとしても、10万年とか100万年の単位で考えるのが妥当であろう。また、一人の人間の人生は、「人間わずか50年」より長くなったが、せいぜい、その倍である。しかも、過去の投影も未来への憂慮もすべて含め、現実には我々が知りたいと思っているのは、今ここで起こっている心の作用であり、時間にしてみれば1分にも満たない持続の範囲で生じるものである。これらのずれは、単純に目盛りがずれているというのではなく、より本質的なずれであろう。今ここにある心の動きを理解し、そこから生じる行動は何かを問おうとする心理学のアプローチと、それよりも時間的・空間的に幅広く客観的に人間を理解しようとするアプローチとは、目盛りではなく尺度そのものが違っているように思う。

進化認知科学的展開を標榜するこのCOEには、他にもいろいろなアプローチがある。脳の生理学的現象の解明にしても、言語の発生的分類にしても、目盛りの違いのような量的差異ではなく、尺度の違い、方向性そのものの違いがあるように思う。本COEは間尺に合わないアプローチの集合だという感もあり、同じ尺度で同じ目盛りを利用して無矛盾の研究を推進する者から見れば、若干ファジィに見えることもあるかもしれない。しかし、人間の心を理解しようとする場合、間尺に合わないことを同時に東ねなければならないことはむしろ当然のことであり、それこそ人間理解のための関門であると考えている。このような融合科学では、地味なデータ集積の努力や強靱な論理という普通のサイエンスの要求以外に、直感的に飛躍する想像力や好奇心が必要であり、また、それが醍醐味であろうと思う。

Contents

間尺の問題	1
新しい研究動向—こんな研究をはじめました!	2-3
若手研究発表支援—海外発表を終えて	4
研究者紹介(その7)	5
進化認知科学連続セミナー2005を終えて	6
プログラムの近況(2005年11月~2006年1月)	7
活動報告(2005年11月~2006年1月)	8

新しい研究動向—こん

精漿タンパク質セミノジェリンと霊長類の社会構造

中山一大(本COE特任研究員)

動物は様々な形の社会を作って生活している。私たちと最も近縁なチンパンジーは、1頭のメスが何頭ものオスと交尾する機会がある複数複雌社会を作る。ゴリラでは、一頭のオスが複数のメスとの交尾の機会を独占することができる単雄複雌社会が一般的である。また、テナガザルは小さな核家族を一つの群れ単位として生活している。このように、種によって社会構造ががらりと変わっている原因はよくわかっていないが、社会構造によって雌を巡る雄同士の競争の激しさが異なっているということは明らかかなようである。複数複雌社会では、他の社会よりも雌を巡る雄同士の競争がより激しく行われる。そのような状況では、雄の繁殖成功度の上昇に寄与するような形質が積極的に進化することが予測される。このような現象を性淘汰と呼ぶ。

霊長類における精液凝集も、性淘汰の影響を受けて進化してきた形質の一つであると考えられている。ヒトの精液は射精直後に粘度が上昇し、ゼラチン状になる。ヒト以外の霊長類では、チンパンジーやニホンザルのようにコチコチの塊になるものもあれば(図1)、ヒトと同じようにそれほど強く凝集しないものまで様々である。興味深い事に、凝集の程度を霊長類種間で比較すると、チンパンジーのような複数複雌の種で、より強固に凝集する傾向が認められる。射精後の精液が雌の生殖器内で凝固することによって、後から交尾する雄の精液の受精を防ぐ、あるいは精子そのものを保護する働きがあると考えられている。

分子レベルでは、精液凝集はセミノジェリンというタン

パク質が物理化学的な作用によって重合することに原因があるとされている。このセミノジェリンは、60個のアミノ酸からなる直列繰り返しドメインを内包する特徴的な構造を有しており、この繰り返しドメインがタンパク質同士の重合に重要な役割を果たしていると考えられている。霊長類各種におけるセミノジェリンのアミノ酸構造を、ゲノム情報を基に推測したところ、精液が強固に凝集する種ほど繰り返しドメインの数が多いセミノジェリンを有する傾向がある事が明らかになった(図2)。このことから、セミノジェリンの構造の差異、特に60アミノ酸繰り返しドメインの数が精液凝集の程度を規定している分子基盤であるということが予測できる。この仮説を検証するためには、実際にセミノジェリンの生化学的・物理学的性質を調べ、各種霊長類間で比較する事が必要になる。セミノジェリンは射精後の精液から回収する事も可能であるが、この場合、回収されたタンパク質が本来の機能を損なっているおそれがある。また、精嚢腺という雄の生殖器官から外科手術によって採取する事も可能であるが、様々な霊長類、とりわけ希少な種に対してこのような外科手術を施すのは現実的ではない。これら問題を克服するために、細胞内でのタンパク質合成システムを試験管内で再構築したセルフリータンパク質合成系を用いて、試験管内で各種霊長類のセミノジェリンを合成する実験系を確立した(図3)。現在はこの系を用いて、様々な霊長類のゲノムDNA情報を基にセミノジェリンを合成し、その比較機能解析を行っている。



図1. 強固に凝集したニホンザルの精液

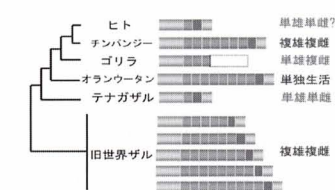


図2 霊長類におけるセミノジェリンのリピート数と社会構造

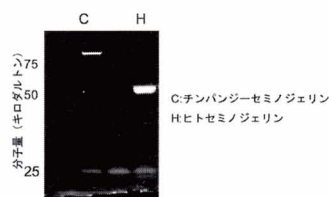


図3 試験管内での合成に成功したセミノジェリン

な研究をはじめました!

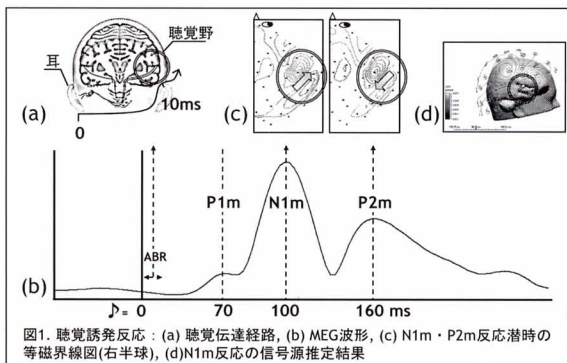
音楽の構造的聴取に関わる脳磁界活動の計測

大塚 明香(本COE特任研究員)

音楽は人間の知性と心の表象的産物である。音楽認知に関わる精神活動には高い情報処理能力が必須とされる為、人間の高度機能研究の対象として、様々な分野で音楽を用いた研究が行われている。ここでは、文法に従って組織化される音楽の時空間構造に焦点を当て、音楽の構造的聴取に関わる脳磁界活動の計測を行った研究について報告したい。

私達は音楽を聴く時、全ての音を同じ様に聴いている訳ではない。聞き流してもいい音から、調性的、韻律的に耳に残る「構造音」を聞き分けている。この重み付けを曲の階層ごとに行っていくと、最終的に骨格として残るのは「音楽の基本構造」と呼ばれるI-IV-V-Iという和音進行列である。基本構造の各和音は機能的役割を持っている。最も安定している主和音Iの提示に始まり、完全協和する音度関係を持つ下屬和音IVへ離脱する。後半部では属和音Vの導音機能により主和音Iが強く想起され、終結への期待が高まった所で主和音Iに回帰してストーリーが完結する。この言語に例えるなら「起承転結」と言えるダイナミズムが、音楽を動かす動力源であると考えられている。そこで、本研究ではこの“基本構造”を基に、きちんと終わる完全終止(I-IV-V-I, I-IV-II-V-I)、途中で係留する半終止(I-IV-II-V, I-VI-IV-II-V)、曖昧に終わる偽終止(I-IV-V-VI, I-IV-II-V-VI)、という3種類の終止法を持つ和音進行列を4-5音のピアノ音で生成し、被験者に提示したときの脳磁界活動を北海道大学付属病院に設置されているMEGシステムにより計測した。

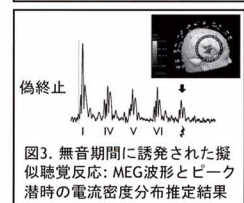
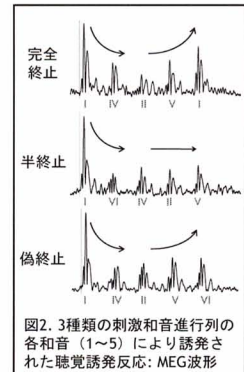
音情報は耳に入ってから約10msで大脳新皮質の聴覚野に到達する。その後、50~200ms間に聴覚野を起源とする活動であるP1m、N1m、P2mと呼ばれる反応が誘発される。図1は、第1和音によって誘発されたこれらの



聴覚反応と、そのピーク潜時における磁界分布及び活動部位を示している。図2は、異なる終止法を持つ3種類の和音進行列の各和音によって誘発された聴覚反応を、和音進行列の種類ごとに示している。まず、全ての和音進行列の2音目において、habituationの影響で反応の振幅が減衰している。が、後半部分に向かって、完全終止の和音進行列では振幅が回復、半終止では回復なし、偽終止ではやや回復、という差異が観察された。これは聴覚反応の振幅が、和音進行列の終止機能の違いを反映した結果であると考えられる。更に、完全終止以外の和音進行列の和音提示後の無音期間に、入力音がないにもかかわらず聴覚野を起源とする明確な反応が観察された(図3)。これは和音進行列の終止機能の影響で、次に来る音に対する想起や注意などが内的に喚起された結果、top-downで擬似聴覚反応が誘発された事を示している。もしもこの無音期間に和音進行を締めくくる最後の1音が提示されていたら、内因性の擬似聴覚反応に外因性の聴覚誘発反応が重なって大きな反応を生じさせたであろう事が想定され、図2の聴覚反応の振幅の回復もこのような内的な処理を反映している可能性が示唆される。

これまでの音楽神経科学の分野では、音楽文法から逸脱する音を提示した時に誘発される反応により、文法処理に関わる脳活動を調べるというようなアプローチが主流であった。が、実際の音楽作品にはそこまで逸脱する要素はあまりない。また、完全に協和する(全く逸脱しない)主和音が最も大きな聴覚反応の回復を誘発したという今回の結果は、音楽認知処理は逸脱や不一致の研究だけでは説明し切れない、新たなアプローチが必要とされているという事を示している。

今後、骨格だけではなくより本物に近い音楽作品を用いた実験を目指すと共に、「何故」「いつ」構造的聴取という能力を獲得したのかという、進化・発達の観点も視野に入れて研究を展開していきたいと思っている。



若手研究発表支援-海外発表を終えて

第9回 国際認知言語学会報告

大堀研究室 古賀 裕章(総合文化研究科・博士課程2年)

2005年7月17日から22日にかけて、韓国のソウルで開催された第9回国際認知言語学会(9th International Cognitive Linguistics Conference)に参加した。5日間で合計約200の研究発表が、様々なトピックに関して行われた。私も機会を与えられ、移動動詞の文法化における力動性(force dynamics)の役割に関して発表を行った。空間の領域における経路と、時間の領域におけるアスペクトとの間に存在する概念的並行性は従来から指摘されており、それが空間的意味を表す接置詞、動詞からアスペクトを表す標識への文法化の動機付けとされている。経路とアスペクトの間の概念的並行性の存在は疑いのないものだが、日本語の移動動詞からアスペクト標識への文法化において、移動動詞の持つ経路以外の意味要素である力動性(force dynamics)が重要な役割を果たすケースがあることを指摘した。2年に1度開催されるこの国際認知言語学会には、認知言語学をこれまでリードしてきた著名な言語学者から、これから担う若手研究者まで、世界中から数多くの研究者が参加する。今回、この学会に参加することにより、多くの研究者の発表を聞き、彼ら/彼女らと接することができ、大いに刺激を受けた。

欧州認知行動療法学会(EABCT)報告

丹野研究室 山内貴史・守谷順(総合文化研究科・修士課程1年)

2005年9月21日-24日に、ギリシアのテッサロニキで開かれた欧州認知行動療法学会(EABCT)に参加して発表した。山内は、対処法に対する認知の仕方と不合理な信念が心理的ストレスに与える影響について発表した。実際にどのような対処法をとるかで、心理的ストレスが軽減することが知られているが、その前に、対処法に対する認知の仕方が心理的ストレスに大きな影響を与えることを実証したものである。この研究によって、対処法に対する認知の仕方を変えることによってストレスが低減される可能性が出てきた。また、守谷は、対人不安における否定的な解釈と自己注目の効果について発表した。対人不安になると、「観察者視点の自己注目」という状態となり、これが対人不安を強めることが知られているが、今回は、対人不安の強い人は、状況を否定的に解釈して、自己注目を強めることを確認した。このような結果から、対人不安の心理療法において、状況の解釈を変えることによって、自己注目に入り込まないようになれる可能性が開かれた。この学会は臨床系の研究者が多く参加しており、どのような事例にこの研究の知見が活かせるのかといった臨床的な質問も多かった。ストレスを導く不合理な信念や対人不安は、人間の長い進化の過程でも生き残ってきたプロセスである。何らかの進化的な意味があるに違いない。今後、こうした問題を追求して、進化心理学の展開に寄与したい。EABCTでは、1日かかりのプレコンgress・ワークショップや、ミニ・ワークショップ、シンポジウムなど盛りだくさんであった。Rachman, S.J., Beck, J., Wells, A., Clark, D.A., Young, J. といったこの分野のトップクラスの研究者が多数参加しており、大いに刺激を受けた。早く英語で論文を書かなければと強く思った。ヨーロッパでの学会であるため、英語のレベルはさまざまであった。その点では自信が付き、われわれ日本人もなら引け目を感じることはないとの思いを強くした。

日本認知療法学会報告

丹野研究室 浅井智久(総合文化研究科・修士課程1年)

2005年の12月9日から10日まで、名古屋で開催された第5回日本認知療法学会に参加した。まだ新しい学会であるが、とても活気のある学会であった。私の属する丹野研究室からも多くの人が参加し発表した。私が発表した研究は、「セルフエージェンシー感に対する学習の効果」である。一般大学生を対象に、「自分自身で行為をしている」という自己主体の感覚をいろいろな条件で調べたものである。知覚と運動の協応の実験パラダイムを用いて、「自分がした」こと同様の感覚を生み出す条件を追求した。さらに、そのうえで、学習によって変えることができることを確かめたものである。「自分がした」というセルフエージェンシー感が薄れるのはいわゆる「離人症」や「強迫行為」であり、さらに進んで他人に何かをさせられていると感じてしまうのが「させられ体験」などの自我障害である。こうしたセルフエージェンシー感の異常の発生機序を調べるために、このような基礎研究をおこなっている。セルフエージェンシー感が学習によって変わるといふ本研究の結果は、離人症や自我障害への心理学的な治療法のヒントを与えてくれるものである。さらに大きく言えば、自己主体感や意図性の個体発生について調べたり、自我障害の進化的な意義について考察できないかと考えている。この学会は、2006年度は駒場キャンパスで開催されることが決まった。次回は発表者としてだけでなく、スタッフとしても活躍したいと考えている。今から2006年の10月が楽しみである。

研究者紹介（その7）

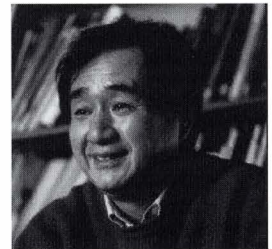
佐藤 隆夫（心理言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると？

知覚の研究、特に視覚、聴覚も少々という感じです。もともとは運動視の研究、動くものを見て、動いていること自体、さらに方向や速度がなぜわかるのか。そのメカニズムを中心に研究を進めていましたが、最近は、奥行き知覚、立体視に中心が移りつつあります。その関連で、バーチャルリアリティー（仮想現実感）なども手がけています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

視覚、聴覚を媒介とする非言語的なコミュニケーションの研究を行っています。聴覚では、音源の数や音源定位の研究を行っています。例えば、隣の部屋で何人かが一斉に声を出した。さて何人の声が聞こえたのか？ という状況を模した実験を元PD（現、認知行動助手）の川島君と行い、はっきり判るのはせいぜい3、4人まで。それ以上は単なる大勢。などという結果を得ています。視覚的なものとしては、視線や指さしの知覚の研究を行っています。自分を見つめられている。自分が指さされているという感覚が生じる視線や指先の角度の範囲がどの程度であるか、また他のどのような要因がこの範囲に影響するかといったことを調べています。これまでに、受容者の周囲に他の人が居るか居ないか、さらには受容者の性格要因などがこの範囲に影響およぼすことが明らかになってきました。教室ごしにじっと見つめられた青春の思い出は、はたして真実なのか幻想なのか？



広瀬 友紀（心理言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると？

心理言語学、とくに人間が言語を理解するしくみについて理解を深めるための研究をしています。中でも、(1) 構文レベルの処理について、文理解や文産出に関わる諸情報の働きをいろいろな角度から調べる実験や、(2) 音声レベルでの処理について、母語の音韻システムと音声知覚処理の関係調べるための言語間比較実験を行っています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

COEのメンバーに加わったのは2005年度からなので、現在は主に上記(1)に関する継続中の研究を発展させようとしているところです。今行っているプロジェクトの狙いは、言語入力に含まれる諸情報が、発し手と聞き手（読み手）の間で異なった意味あるいは役割を持つのではないかという可能性をつきつめて考えようというものです。具体的には、韻律情報について「ある発話に伴う韻律情報について、話し手側の動機と、聞き手側の情報としてのとらえ方が異なる」「統語的曖昧性を解消するために話し手と聞き手が利用する韻律情報が質的に異なる」「書かれたものを黙読する場合でも韻律情報が（書き手の意図しない形で）影響している」などの興味深い現象があることをまず実験により確認し、それに説明を与えることができるようなさらなる検証実験を行っていきたくと思っています。来年度以降は、韻律情報の生成・処理に様々な視覚的文脈がどのように影響するかについても検討する予定です。また、同時に、このCOEプロジェクトの中心理念を実現する一助となるために、様々な、それで行ってほしい何かしら共通した研究背景を持ったメンバーの皆さんと、もっとどのような面白いことができるかと考えています。



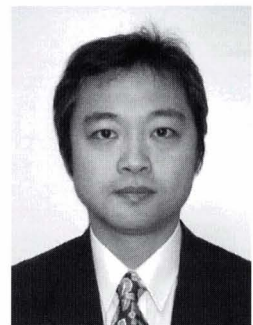
村上 郁也（心理言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると？

読字・読書の根本を支えるのは、視覚入力の正しい情報処理と、眼球運動の正しい制御、またそれらの正しい実時間協調です。私はこれまで、人間の視覚情報処理の仕組みを実験的に研究してきました。特に、視覚運動・充填知覚・眼球運動など、比較的低次とされる視覚情報処理に関して、錯覚現象のメカニズム解明と脳内モデル構築を軸に、視知覚実験を行っています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

不随意的な眼球運動と、錯覚現象との関連を調べています。私たちの眼には不随意的な細かい揺れが常に生じており、それに伴って網膜像も常に揺れています。固視微動と総称されるこれらの揺れは網膜像を常にリフレッシュする機能をもっていますが、反面、網膜像の揺れが視覚世界の揺れとして意識されないようにしなければなりません。その処理メカニズムを探る上で、特殊な視覚刺激を観察した後では自分自身の固視微動に伴う像の揺れが見えてしまうという錯覚現象を発見し、このことから、網膜像の揺れを脳内情報処理で解消するモデルを提案しています。今年度は、固視微動量と錯視量との相関関係を調べているうちに、近年非常に有名になった錯視現象においても面白い関係があるのを発見しました。その現象とは、『錯覚展』で北岡明佳さんの出展した『蛇の回転』に代表される、運動印象を生む静止図形です。我々は、図形観察中の固視微動がこの錯視現象の原動力となっていると考え、観察者の感じる錯視の量を測りながら、そのときの固視微動の量を測り、これらを比べてみたところ、実際に固視微動量が大きい観察者ほど錯視量も大きい、つまり眼が動くほど錯視も動く、という関係があるのがわかりました。この特性を定量的に確かなものとするため、現在いろいろな研究上の角度から調べを進めているところです。



進化認知科学連続セミナー2005を終えて

昨年に引き続き、2005年10月から2006年1月にかけて進化認知科学連続セミナー2005を開催し、全11回が無事終了した。この連続セミナーは、COEの教育プログラムと公開事業を兼ねるものである。教育面では東京大学の教養学部と文学部の2～4年生向けの講義科目として、またCOEの若手研究者が国内外の一線の研究者と触れあう機会として企画された。また講演会情報は、ホームページといくつかのメーリングリストを通じて学内外へ配信された。今回は、各回とも100名以上の受講者、参加者を集めることができ盛況であった。

- 第1回 長谷川寿一（本COE）「イントロダクション: 進化認知科学の目指すもの」
- 第2回 小林洋美（JST）、橋彌和秀（九州大）「グルーミングする視線—コミュニケーション装置としての目の進化」
- 第3回 小林春美（東京電機大）「ヒトはことばの意味をどう獲得するのか」
- 第4回 平田聡（林原類人猿研究センター）「霊長類の社会的知能」
- 第5回 Debra Lieberman（University of Hawaii）"A cross-cultural investigation of the cues governing kin detection using patterns of incest avoidance and altruism"
- 第6回 長谷川真理子（早稲田大）「性差の進化生物学的基盤」
- 第7回 Richard Bryne（University of St. Andrews）"Understanding ape minds with evidence from nature"
- 第8回 開一夫（本COE）「発達科学と進化認知科学の接点」
- 第9回 大平英樹（名古屋大）「適応のための脳—身体相関」
- 第10回 橋本敬（北陸先端大）「言語の起源と進化～構成論的方法によるアプローチ」
- 第11回 清水和巳（早稲田大）「経済学と「進化」」

上が今回の連続セミナーの演者と演題であるが、現在の進化認知科学の扱う領域の広さがおわかりいただけることだろう。対象は、人の知覚から認知、言語、経済活動まで、方法論は、動物との比較、発達、構成論的手法、神経科学など、講演者は国内外の新進気鋭から大御所までと非常に多彩なプログラムであった。しかし、「人間の心や精神活動を進化的に理解する試み」というシリーズとしての統一は保たれており、聴衆の皆さんにもこのアプローチの有効性がご理解いただけたものと信じている。

講義として受講している学生諸君に対しては、約1時間のトークの後、ゲストから講演内容に関連した短いお題が示され、ミニレポートにまとめるという課題が課せられた。短時間で答えるには、難しいテーマも多かったにもかかわらず、受講者たちは熱心に回答してくれた。コーディネータとして教室を見渡すと、トークに対する学生諸君の集中度が非常に高く、関心の強さがひしひしと伝わってきた。

今回も海外からのお二人のゲストにお話いただいたが、パワーポイントを用いた明快なプレゼンテーションであったため、学生諸君からはよく理解できたという感想が聞かれた。東京大学でも語学科目以外では英語による講義はほとんど無いのが実情だが、今回の試みからは極めて教育的効果が高いことが示された。是非、今後につなげていきたいと考えている。

（長谷川寿一、拠点リーダー）

プログラムの近況

(2005年11月～2006年1月)

まず2006年1月末日時点での、本プログラムの組織について改めてご報告しておこう。事業推進担当者は22名で、その所属は東京大学の中でも総合文化研究科、理学系研究科、農学生命科学研究科、人文学研究科、工学研究科、総合研究博物館にまたがっている。東京大学では現在28のCOEプログラムが進行中だが、本プログラムは其中でもっとも学際的で領域横断的なものである。事業推進担当者と共に研究活動を支える拠点形成特任研究員は16名、RA(大学院生)は11名、技術・事務補佐員7名である。また本COEでは公募研究プロジェクトを実施しており、4名の総合文化研究科教員がそれを担当している。COEの大きな目的の一つは、若手研究者の養成ということである。本COEでは若手研究者(PDと大学院生)による公開の研究発表を、例年、6月の総合文化研究科広域科学専攻の研究室公開、8月のオープンキャンパス、そして12月の若手研究成果発表会の年に3回のペースで行っている。これらは学内での研究発表会であるが、国内外での若手の研究発表を支援する制度も設け、研究発信を後押ししている。本COEがスタートした2003年における、たとえば、COE関係の大学院生の海外学会発表のべ数は15件であったのに対し、2005年は23件に伸びた(国内発表は47件から52件へ微増)。また学術雑誌への掲載数も2003年の8件から2005年には16件へと倍増した。では、事業推進担当者の研究業績は伸びただろうか。学術論文数自体は、2003年の116件(20名)に対し2005年は102件(21名)とむしろ減っている。これには2003年がその前後でもっとも業績数の多い「当たり年」だったという事情が関係している。自然科学系の研究者(7名)がJournal Citation Report掲載誌に発表した論文についてみても、論文数自体はこの事情で、40件から23件(第一著者または代表著者でみると、26件から15件)へと減少している。しかし、1999-2003年と2001-2005年の2期でJCR掲載紙のImpact Factorの合計を比較してみると、269.9から348.6(第一著者または代表著者では112.2から129.8)と増加しており、以前と比して質の高い雑誌への論文発表が増えていることが示された。数字がすべてではないが、この3年間を振り返ると、COEが若手、教員双方の研究にプラスの効果を持ったと言えるだろう。



2005年12月、若手研究発表会後に撮影

(長谷川寿一、拠点リーダー)

活動報告 (2005年11月~2006年1月)

1 COE研究発表会 (事業推進者等の研究発表・討論会)

- 第31回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年11月2日、駒場キャンパス13号館1313教室 (担当: 長谷川寿一) 平田 聡 (林原類人猿研究センター) 「霊長類の社会的知能」
- 第32回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年11月9日、Debra Lieberman (University of Hawaii) "A cross-cultural investigation of the cues governing kin detection using patterns of incest avoidance and altruism"
- 第33回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年11月16日、長谷川眞理子 (早稲田大) 「性差の進化生物学的基盤」
- 第34回 COE研究発表会**
2005年11月21日 18:30~、駒場キャンパス3号館113室生命・認知科学科講義室、村上郁也 (総合文化研究科広域科学専攻) 「固視微動と運動視知覚」、広瀬友紀 (総合文化研究科言語情報科学専攻) 「syntax-prosody mapping における非統語要素の干渉」
- 第35回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年11月30日、Richard Bryne (University of St. Andrews) "Understanding ape minds with evidence from nature"
- 第36回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年12月7日、開 一夫 (本COE) 「発達科学と進化認知科学の接点」
- 第37回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年12月14日、大平英樹 (名古屋大) 「適応のための脳-身体相関」
- 第38回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2005年12月21日、橋本 敬 (北陸先端大) 「言語の起源と進化~構成論的方法によるアプローチ」
- 第39回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005**
2006年1月11日、清水和巳 (早稲田大) 「経済学と「進化」」

2 COEシンポジウム・セミナー (共催のものも含む)

- 第28回: COE共催講演会およびチュートリアル**
「言語研究者のための認知脳科学公開チュートリアルおよび講演会」
主催: 東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」
2005年11月14日~16日、東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟6階ホール、講師: Ina Bornkessel博士 (Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences, Germany)、Matthias Schlesewsky博士 (University of Malburg, Germany) 演題: Against Cross-linguistic Uniformity in the Neurocognition of Language: The Neurotypological Approach、チュートリアル: Event-related Potentials in Language. 入門編・応用編
- 第29回: COE主催ワークショップ**
「移動事象の概念化とその類型」
2005年12月3日 10:30~、駒場キャンパス18号館4F・コラボレーションルーム1 (担当: 大堀壽夫、クリスティーン・ラマール) 守田貴弘・古賀裕章・相原まり子 (東京大学) 「対訳テキストを用いた直示移動の対照研究」、松本曜 (神戸大学) 「使

役移動と視覚的放射における経路概念の言語表現」、村上雄太郎 (レー・バン・クー) (茨城大学) 「ベトナム語の直示移動動詞: その用法と文化化」、R. ケッサクン & C. ラマール (東京大学) 「直示移動の対象研究: タイ語と中国語」

第30回: COE共催セミナー

2005年12月13日 11:00~、駒場キャンパス 情報教育棟4階会議室、大武美保子 (東京大学) 「神経系マルチスケールシミュレーション、ヒトセミナー、100時間ワークショップによる学術統合化・融合研究」、福島宏器 (総合文化研究科広域システム科学系) 「他者認識にかかわる人間の脳神経活動」、宮崎美智子 (総合文化研究科広域システム科学系) 「幼児における遅延自己映像の認知」

3 COE主催・共催研究会

第53回: COE主催講演会: リーバーマン講演会

2005年11月8日 16:30~、駒場キャンパス3号館1階113講義室 (担当: 長谷川寿一) Debra Lieberman, Department of Psychology, University of Hawaii "A cross-cultural investigation of the cues governing kin detection using patterns of incest avoidance and altruism"

第54回: COE共催講演会

2005年11月15日 16時~、駒場キャンパス情報教育棟3階 セミナー室1 (担当: 開一夫)、渡邊克己 (産業技術総合研究所) 「両眼視野闘争を用いた視覚メカニズムの研究」「動機を行動に変換する神経機構」「色フリッカーに対する脳磁場反応」

第55回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

2005年11月27日 15時~、駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4 (担当: 田中伸一) 原口庄輔 (明海大学)、音韻論と音声学とシラブルの理論

第56回: COE主催講演会: ポリックセミナー

2005年12月8日 13時~、駒場キャンパス情報教育棟4階会議室 (担当: 開一夫)、講師: Frank E Pollock (University of Glasgow)

第57回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

2005年12月18日 15時~、駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4 (担当: 田中伸一) 本間猛 (首都大学東京)・小島千里 (首都大学東京) "Typology of blending in Japanese"

第58回: COE共催セミナー: 比較認知発達懇話会

2006年1月10日 11時~、駒場キャンパス 情報教育棟 4階会議室 (担当: 開一夫)、Claudia Uller (Essex Univ.) "How the mind conceptualized the world: Cognitive developmental approach"

第59回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

2006年1月15日 13時~、駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4 (担当: 田中伸一) Gelbart Ben and Shigetō Kawahara (UMass) "Psychological reality of sublexica in Japanese" 田嶋圭一 「第二言語音声知覚における音節とモーラの役割」

第60回: COE主催研究会: Curry会

生体信号の解析手法勉強会、2006年1月23日 14時~、駒場キャンパス17号館1階 本COE赤ちゃん会議室

第61回: COE共催講演会: 日韓対照研究会

2005年12月27日 13時~、駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム3 (担当: 生越直樹)、李漢燮 (韓国高麗大学) 「日韓対訳コーパスの作成及び利用について—対照研究・日本語教育への活用を目指して—」

東京大学 21世紀COE「心とことば」進化認知科学的展開

〒153-8902 東京都目黒区駒場3丁目8番1号
東京大学駒場キャンパス17号館
TEL/FAX 03-5454-6709
ホームページ <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>
発行日 2006年2月15日